



スーパー グローバル ハイスクール

佐高 SGH通信 2019

No. 20 (令和元年 9月 27日発行)

SGHクラブの活動レポート

SGHクラブ研究班マレーシア フィールドワーク

夏休み始め、7月21日(日)から26日(金)にかけて、SGHクラブ海外研究班(14名)がマレーシアのサラワク州でフィールドワークに取り組みました。それぞれ「森林・焼畑分野」「森林・観光」「民族・文化」「教育・言語」の4チームを結成し、活動を行いました。以下概要を報告します。

1日目

～佐野⇒成田⇒クアラルンプール⇒クチンの移動～

初日は、バス、飛行機の乗り継ぎで丸1日を要しました。海外経験が初めての団員も多く、出入国を実際に体験し、思い出に残る経験となりました。また機内・車中では、翌日からのフィールドワークについて、十分話し合うことができました。



3日目

～「アナライス村(ピダユ族の村)」訪問～

3日目は、現存する多くの民族の内の一つであるピダユ族のアナライス村でフィールドワークを行いました。村の見学後、「森林・農業チーム」「森林・観光チーム」「民族・文化チーム」「言語・教育チーム」の4班に分かれて、それぞれのチームが村人に自分から英語で話しかけて、情報を集めるという活動を行いました。天候は2日目と同様に土砂降りの雨でしたが、約2時間のインタビューをすることができました。生徒たちは最初こそ戸惑っていたものの、すぐに適応して積極的に話しかけ始めていました。村を訪れていた、世界各国からの観光客(イギリス・フランス・チェコ・ウクライナ等)から情報を集めているチームもありました。その後、昼食前に集めた情報を共有するべくプチ発表会を行いました。

2日目

～「マタン野生動物センター」訪問～

サラワク州森林公社の同センターにおける森林の保全活動や施設の説明を聞いた後、オランウータンの世話や餌付けを体験しました。ここでは野生動物の引き取りや負傷したオランウータンを保護して治療や餌付けを行い、自然に返すという活動をしていました。生徒たちは係員の皆さんから英語での説明を聞き、英語で積極的に質問し、大変勉強になった説明会と餌付け体験でした。



～「サラワク文化村」訪問～

「サラワク文化村」では、先住民族の住居や施設を見学し、住居や集会場での伝統音楽の演奏や工芸品作りなどを見学し、最後にホールで行われた伝統舞踊を鑑賞しました。



～「イオンモール マレーシア・クチン」見学～

ガイドさんの提案で、現地に進出している日系企業の研究の一環として、イオンモール マレーシア・クチンを訪れました。多民族国家マレーシアにおける日系巨大企業イオンの海外戦略の一端を見学しました。

4日目

～「セント・テレサ中等教育学校」訪問～

この日は中等教育学校、大学訪問を行いました。
午前中は宿泊先からすぐ近い場所にある、セントテレサ中等教育学校を訪問しました。まず、校長先生から歓迎の言葉をいただき、続いて先生方の紹介、生徒会による学校紹介がありました。その後、本校の2学年の生徒たちによる佐野高校の紹介を行いました。続いてセントテレサ校の生徒会の皆さんに校内を案内していただき、2班に分かれて授業を受けました



～「UNIMAS(マレーシア国立サラワク大学)」訪問～

午後は、マレーシア国立サラワク大学 (UNIMAS) を訪問しました。言語学部と資源学部で各学部長の学部説明を聞き、生徒たちも教授との質疑応答を英語で行いました。それぞれの学部で、名物のスイーツをいただきながら、交流会を行い親睦を深めました。



5日目

～「クチン大規模市場」「サラワク博物館」見学～

午前中はまず、クチン市内の大規模市場を見学しました。ここでは、クチンで栽培している野菜・果物や、近海で採ることのできる海産物を流通していました。特に、何種類ものバナナや、香辛料(胡椒・唐辛子等)がたくさん売られていました。

その後、「サラワク博物館」を訪れ、サラワク州の歴史について学びました。ここからホテルまで近いので、午後は自由時間とし、各自クチン市内を自由に散策しました。



6日目

～クチン⇒クアラルンプール⇒成田⇒佐野の移動～

5日目の夜から6日目の朝にかけて、クチン空港からクアラルンプール国際空港を経て、空路、帰国の途に就きました。団員全員、元気に成田空港に到着しました。団員全員が、初めてのマレーシア訪問でしたが、盛り沢山の計画を消化しながらも、現地の生徒や先生方、そして市民の皆さんとの交流を深め、実り多いマレーシアフィールドワークとなりました。

《マレーシア班の皆さんのコメントです》

<2-1 秋山 華乃>多民族が共生するには互いに尊敬し合い文化を理解することが大切だと知った。日本での課題が明確になった。

<2-1 関谷 愛可>文献調査だけでは得られない予想以上に多くのことを得ることができた。更に研究を深めていきたい。

<2-2 安部 悠菜>現地の高校生と話す機会があり、英語力不足を感じた。コミュニケーションには積極性が大切だと思った。

<2-2 大塚 萌絵>現代社会に残る様々な問題も、国や言語や生活様式が異なれば捉え方も変わると感じた。

<2-2 橋本 梨花>マレーシアでの英語教育や母国語保護の取り組みから、日本が学ぶべき点が明確に存在していると感じた。

<2-3 千葉 莉香子>高校・大学の訪問から、英語の重要性を伝える教育が日本には足りないと感じた。今後の研究に活かしたい。

<2-4 秋野 恵理>いくつかの宗教が共存し日本とは異なる文化を感じた。何とかコミュニケーションがとれて嬉しかった。

<2-4 荻原 彩加>調査の中で、農業形態や社会における農業の役割・位置も、日本とは違いがあると感じた。また、マレーシアが抱える問題も他人事ではないと感じた。

<1-1 後藤 秋浜>クチンは日本との比較研究に適した街だと感じた。世界に対する見方が変化した。FWで得られたことを今後の研究に生かし、内容の濃い研究にしたい。

<1-1 原 悠馬>多民族が互いの文化を尊重しながら生活していてとても興味深かった。オランウータン保護施設見学では人間と自然との共存は難しいと改めて感じた。

<1-3 相田 紘夏>「百聞は一見にしかず」のFWだった。インターネットでは得られない多くの情報が得られた。FWを最大限に生し、明確な目標を立てて研究を進めたい。

<1-3 内田 小温>自分の目で見て現地の人の声を聞いたことで、多くのことを吸収できた。特にアナライズ村とサラワク大学では農業について深く学ぶことができた。

<1-4 大嶋 美聖乃>森林問題について理解を深めることができた。また、村や市場、高校・大学訪問などは貴重な体験となった。

<1-4 山本 悠貴>異民族同士仲が良いことに驚いた。現地の学校の話の中で「リスペクトしている」等、想像とは正反対の答えを得られて、FWの重要性が理解できた。